

「光の道への案内人ヨハネ」

～喜びのダンサー、バプテスマのヨハネ～

「ここにひとりの人があって、神からつかわされていた。その名をヨハネと言った。この人はあかしのためにきた。光についてあかしをし、彼によってすべての人が信じるためである。」
ヨハネ福音書1章6・7節

ある老夫婦に特別なことが起きた。それは信仰の祖、アブラハムとサラに与えられたイサクにも似ているが、それにも勝るとも劣らぬ、救い主の直前を歩み、そして、すべての人々をその主に備えるための存在だった。その名はヨハネと言った。

先日、武井先生の大和でのメッセージの前に、先生の脚本で上演された「シンデレラ」の人形劇を観ました。良く知った内容でしたが、一つだけ大きな発見がありました。それは、「シンデレラ」という名前の意味が「灰かぶり」というママははやその娘たちに付けられたあだ名だったこと。その意味は埃っぽくて汚いというイメージでしょうか。そして、そんな埃っぽくて汚い存在が、特別な王子様の妃になるというハッピーエンドなお話し。実はシンデレラは私たち一人一人を指していて、王子様はイエス様。罪で汚れた私たち「灰かぶり」な存在を心から愛して、結婚までしたいと願っておられるお方がイエス様です。どうして、イエス様は私たちと結婚したいと願っているのか？それは、けなげでも、その汚れた状況を認め、受け入れ、一生懸命生きていく存在をイエス様は心から愛してくださるのです。そして、汚れた私たちをそのまま愛し、抱きしめてくださるのです。私たちを責める、ママははやお姉さんたちの言葉に傷つくシンデレラですが、神様の約束は決して変わらないのです。

クリスマスはそのすべての全人類の「シンデレラ」たちを救うために、王子様であり、救い主であるイエス様が希望の光となってこの地上にやって来られた素晴らしいときです。その希望の光を紹介するためにその半年前にこの地上に生まれたのはバプテスマのヨハネです。暗闇に光が映し出されれば、誰もが気づくでしょうが、現代のように様々な教えや情報が入り乱れている状況ではなかなか見つけにくいものです。ヨハネの時代ももともとあった伝統的な宗教が彼らの目を見えなくしていました。

ヨハネは戦う預言者というイメージが強く、とてもお堅いイメージがありますが、ガブリエルがザカリヤに語ったヨハネの存在は、「喜びと楽しみをもたらす」存在として表現されています。「楽しみ」という言葉は、「歓喜」とか「小躍りして喜ぶ」という喜びが非常に大きく、思わずリアクションしたくなるという意味の言葉です。きっと、ヨハネはいつも主の喜びに満たされて、ダンスばかりしていたかもしれません。ルカ福音書の主要なテーマでもある「喜び」は、クリスマスのテーマでもあります。すべての暗闇を吹き飛ばすような「喜び」をこのシーズンに味わいましょう!